Osaka University Knowledge Archive

Title	建築的なるもの : ある空間分節について（ノート）
Author(s)	田中, 喬
Citation	デザイン理論. 1968, 7, p. 82-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52497
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

建築的なるもの

―ある空間分節について(ノート)―

田　中　　喬

1

空間の分節についてしばらく考えてみようと思う。

大和に国家が形成された三世紀のころから、京都盆地は「ヤマシロ」と呼ばれるようになった。この「ヤマシロ」という呼名に宛てられる文字が、時代と共に二三移り変ってきた。「山代」、「山背」、「山城」などがそれである。林屋辰三郎によればこの変遷は次のように説明される。『古事記などには「山代」という文字が用いられているし、その後は「山背」となり、平安時代以降に「山城」と書かれたことは周知のことだ。このもとの「山代」については、日本書紀の崇神天皇条に倭香山の土を取って「是倭國之物実」と祈る個所があるが、この物実が「望能志呂」(モノシロ)と割註によまれている。この倭国の物実とは他ならぬ倭国そのものを指しているので、それなればこそ武埴安彦が国家を奪う呪願に用いたものであった。このように「シロ」とは「実」であって、やましろとは山の実、すなわち山そのものを意味していた。具体的には山を形づくる山林である。したがって「山代」という文字は、そのような樹木の生いしげった山中の国をあらわしていたのである。』(林屋辰三郎：京都)京都盆地は

大和からみれば、森林におゝわれた山でしかなかったわけである。この「山代」がやがて「山背」に変わる。山の背であり或は山の背後である。それは位置による場所の確認である。しかしながらこの時もまだ、京都盆地は山の彼方の未開の後背地としても見られていたのであろう。吉田東伍の大日本地名辞書によれば『ヤマシロは古字山代又は山背に作る、実にヤマウシロの義なり。』として、さらに『ヤマシロを又万葉集には開木代に作る、畧解云聖武紀久邇遷都の条に「伐山開地以造室」とありて開木を山とよむべし、木を採るところは山なれば也と。』という。即ち久邇遷都の頃よばれたヤマウシロは、伐山開地してはじめて室を造るようなヤマ開木であり、未開なhinter-landであったわけである。だがやがて平城京からこの「山背」に遷都が行われ、京都盆地は今やはじめて自の側から自の場所を、しかも新たな視点からそれを城として眺めることになる。『延暦13年、桓武天皇は車駕を新京にすゝめて、遷都の詔を発した。「此國山河襟帯、自然に城を作す。斯の形勢によって新制すべし」として国名も山背を山城と改めた。』(林屋辰三郎：京都)

私はこゝで「ヤマシロ」の国の歴史を書いていくつもりはない。むしろ以下しばらく場所についてのわれわれの観方、場所を限定し把握するいろいろなし方について考えてみようと思う。「ヤマシロ」を山代、山背、山城とするのも夫々ちがった視点に立っての場所の把握である。場所に対してわれわれはそれを確定しidentifyし、identifyした夫々を組織し構造化する。或はidentifyすることそれ自体のうちにすでに構成する機能が含まれているのかもしれない。そして、この場所の限定と組織とを支えている視点にはどのようなものがあるか、とりわけ空間性にもとづいて眺めた把握がどれ程に本来的であり、根源的なものであるのか、さらに又、空間的な構造化が、場所において在るわれわれの感情や情緒的生活に対してどのような働きをもち、どのような必然性をもつのか。感情や情緒が空間構造化へのどのような動機となるのか。これらは夫々が非常に大きな問題であり、もとより以下のわづかなノートで十分に述べられる筈も

ないが、こゝではむしろこのようないろいろな問題点の所在の糸口を若干さぐり出してみようと思う。

2

「山代」は山そのものであり、事物としての山そのものをその場所にみたのである。事物としてその場所が確定したのである。これに対して「山背」の場合には、それがたとえ後背地hinter-land として意味を与えられているとしても、山の背、山の背後、山の彼方として即ち空間として、空間の関係として把えられている。「山城」は「自然に城を作す」の言葉通り、城としての作用として、機能として場所が注目されているわけである。いづれにしても、それらは、場所において、実体なり事物なりを見、その空間的位置的関係を限定し、或は場所の機能、働きに注目する。それぞれは、たしかに対象としての場所を把えるものではあるが、これらの把え方は明らかに違った立場にあってのものである。

場所の観方のこのような差異を示す例は、何も「ヤマシロ」に限られたことではない。われわれが、まわりに今なお受けついでもっている無数の地名は、非常に多様であり、したがって、その語義の解釈も十分に解明されているとはいえないが、それにしてもそれらはいくつかの基本的な観方に分類整理されるだろう。今かりに柳田国男の「地名の研究」に拠りながら、さまざまな地名の確定されるいろいろな視点をしらべてみよう。

地名の多くのものは、その場所の地形、地勢の特長によって名づけられたものであろうことは当然予想される。京都の地が山城であるのに対して、奈良の都を平城とも書くが、前者は城の機能を見るのであろうが、平城は、「ナル」、「ナロ」につながり、山腹の傾斜の比較的緩なる地、東国に於ては何の平と言い、九州南部では「ハエ」と呼ぶ地形を、中国四国では凡てナルといっている。この語はナラス（動詞）ナルシ（形容詞）ナラシ（副詞）とも変化し、もとも

と決して大和の旧都にばかり用いられた語ではない。平、成、鳴、呼、などの文字も宛てられる。平地と書いてナルジと読ますところもある。

ホラと読む所は、入込んで外から見えないような地形の場所で、他所でタニ、サワというものから、ヤツ又はサコ、ハザマというべき盆地にも及んでいる。タニとかサワとかいうのは、僅かな岡と岡との間で、水もあり日当りもよく、外からは隠れて奥へも通り易い地形を呼び、ところによってはヤツの代りに用いてもいる。

富士、布土、富戸、保戸等々書かれるものは、フト、フットであり疑もなくホド即ち陰部である。ホドは本来秀処であり、身体中最も注意すべき部分をいうという。これらの地名は海岸沿いに多く、海岸に沿うて漕ぎ廻る船から見れば、二つの丘陵の尾崎が併行して海に突き出している所、その二丘陵の間からは必ず小川が流れ込み、川口の平地には普通の漁村に比すればやや繁華な邑落があって、川上へ又は山越に少々の商業運送を経営しているという航海者には見遁すことの出来ない主要な地点である。フトは又山中にもある。山中ではフドノとよく呼ばれ即ちホド野であって、両山の間の低地で耕作に適する場所である。クボも地形から見ればホドと類似していて、クボイ（形容詞）、クボム（動詞）から直接地形を説明することも出来るが、古くはクボも、同様に、陰部を称したことが指摘されており、身体のクボに似た地形故こう呼ぶのかも知れないという。

ダイという地名語は音は同じでも地方によって少くとも三種の異った意味をもっている。その一は河沿い海沿いの段丘のごとき、上の平らな高地のことで、文字通りに物の台に形が似ているからいうのであり、台の字を使い、その二は畿内などでいう代で、他の地方でいう組とか坪とか区とかに相当し、これは耕地の一区域をシロと言ったのが元かも知れないとされている。この代は地形には関係しないとしても、第三の岱、堆、平、などが宛てられるタイは、やはり傾斜地のことであり、時に平の字をサカと発音する苗字があるのも、タイが傾

斜地であるがために、それを飜訳すれば阪にあたるからだろうという。

地形に発する地名を述べていけばきりがない。ある地形に他の地形と際立って目立つ特長があれば、それに注目してその場所を認知し、identify することは至極あたりまえのことだろう。だが地形に劣らず他にさまざまな関心をもって場所はながめられる。とりわけ農耕を生活の支えとした人々は、それと直接につながる場所の特性を読みとる。場所が湿地であるかどうかがその一つである。湿った地humidな場所はいろいろな呼名こそあるが、場所の顕著な特性である。古いのはウダという語で、大和でも山城でも既に郷名郡名にさえなっているが、今も広く東西に見られ、ムダ牟田やヌタ、ニタも同根である。野田、岱、怒田、仁田なども同様な湿地である。或は湫の字を宛てたクテ、グテ、久手と書くギュウデなどもhumidな地に名付けられた。クテと同じであろうと思う水づいた低地を、地方によっては、フケ、フゴ、又はクゴといい、或は、アラワともドブとも言った。いづれも水が近くにあって交通のさまたげにはなるが、山中でない限り開いて田にし易い地である。他にアハラ、ウキ、トマン、など夫々に水っぽい地を指す。

オンヂ、ヒウラ、ヒオモ、ヒナタ、アサヒなどの地名は、又違った一分類をなす。オンヂは陰地であり、ヒウラと共に東南に山をひかえて日当りのよくない所を謂い、他の条件が良いと折々田にも畠にもするが、普通は杉林などにしておく。ヒカゲも同じである。ヒオモ、ヒナタ(日向)、アサヒはこれの反対でsunny placeでありbrightな場所である。アテラという語も面白い。そのアテというのはもともと一本の材木の日を受けない側、即ち成長が悪くて木理が伸びず、節立って反り易く加工が困難な部分だから嫌われ、それにつゞいて、物のよくないのを皆アテというが、それが場所についても同様に、陰地又は日陰の義である。そして更には、瘦地で、作物に適さない地を言うようにもなるという。

ユラ、ユリという地名はどうであろう。これらは海岸沿いに多くて水の動揺

に由って平げた岸の平地をいう。即ち、ユラグ、ユルなどの言葉が転じたらしい。その海辺の場所の自然の表情が、ユラグ、ユルなどの語の感覚的な表情に密着したものだろう。状況が相貌としてそのまゝとらえられ、その相貌が言葉に融け込んだものであろう。

ここまで述べてきたさまざまな地名は、それぞれにさまざまなvariation を含んでいて複雑なように見えながらも、それらを観方にしたがってよりわけてみれば、上述のように、二三の根元に立還える。地形、地勢の特長による地名、土地の湿乾や、土地の日照による明暗や陰影に注目した地名、土地の感覚的相貌をそのまゝ把えた地名、などである。それらは、言うなればその土地の属性attributes への関心である。形態、明暗、色彩、表情などはその場所を、その場所のrealityを支える属性である。そしてそれらの夫々の属性は、その場所の感覚的sensory な把握と密接につながっており、それだけに、直接的な根元的な視点であろうことがわかる。

attributes のいろいろと共に場所に物そのものを見る地名にも注目しなければならない。山代の山のように、そこに岩や木や清水そのものを見る。岩や木や清水は、山のようにある拡がりを占めているというよりは、むしろ点的な物である。点的な事物がその事物を含む周辺一帯の地をあらわす名としてとどめられる。ゴウラ、コウラ、ゴラ、ゴウロ、ゴロ、などは、すべて岩石が露出している小区域を意味するもので、耕地その他への土地利用から除外しなければならないために、消極的に生活との交渉を生じ、終に地名を生ずる迄注目をひくようになったものであるという。ゴウヤも「石多くして空地なる故に名とす」とありゴウラと同じであるという。

ケイライシ(教良石、久来石、教良寺、高麗寺、倉石など)、ケウラギ(教良木、京羅木、京良城など)などは元々、寺でも城でもなく、石であり木であり、しかもそれらが清らであるものである。その場所に言うならば霊石、霊木があったものゝようである。語尾にラキをもつものが多い。例えば、シガラキ、ウ

ハラキ、久多良木、多多羅岐、加布良胡、等々。

カウゲ、は高下、郡家などの文字も宛てるが、その本来の意味は芝などの生えた開けた草生地のことである。芝、原の字をカウゲと読ます。普通の野や原には矮樹林や潅木叢があるのに、これと区別した芝原である。芝草をカガといい、芝原をカガハラという方言もある。このカガもカウゲと一語である。加賀、足利のカガも草地のことである。いづれにしても、こゝではその場所を覆う草や芝が実体としてその呼名となっているわけであろう。

場所を限定するためには、その場所のいろいろな属性に着目し、或は、その場所を占める事物をとらえようとする他に、空間の関係そのものに於て、空間配列空間分布そのものに於てそれを行うものも多い。

ヰナカ田舎とは、居の中だという。天草の一古村の古い村絵図によると、この村は西に小さな湾を控えた一つの盆地で、人家は大体周囲の山の裾に構えられ、道路も本線は麓に沿い耕作地を通らない。中央の田のある部分にはヰナカと記されている。ヰナカはヰの中で、ヰは家居の居である。ヰノウエ井上も、堰に臨んだという意味ともとれようが、居の上であり、ヰノウエゆ路は、民居の裏山の山路ということだろうという。

サンキョは、散居とも参居とも三居、或は山居とも書くが、これが必ずしも山中に限られてあるばかりか、平地にも往々にあり、海岸近くにもある。これを説明して、家族が増加する場合、分家制度に伴ってその家族の一部がその元地から分離して遠い原野の開墾に着手する、この分散を言うとしてむしろ散居の字が最もふさわしいとする。たとえ山居と書いても、それが多くの場合に当っているというにすぎないのだろうか。この語は空間配列が散在したパターンをなすことから生まれたわけである。

カイト垣内も空間的限定である。貝戸、海道、皆渡、開土、外戸、など宛てられるし、カイトがカイゲとなって、界外とさえ書かれる。垣内は必ずしも、実際に垣の内で、所謂土豪の囲い込んだ場所を指すとは限らず、出村、分郷、

枝村などを垣内と呼ぶのであるから、むしろこれは、現実のphysicalな垣の設定の有無にかゝわるよりも、institutionalな土地占有、属地の観点からの内、外の区別であろう。界外の界の字には、土地区画の思想がかすかに伝わっているのであろうという。

空間にかゝわる地名の最後に、ヒョウをあげておこう。ヒョウには屡々、峠の字が宛てられる。他に嶺、瓢、俵、鋲、兵、嶠、尾餘など。何故峠、嶺をヒョウと呼ぶのか。上述の宛字のうち、嶠は地形にもとづいて山扁を附けたが、元は標であり、澪標(ミオツクシ)のツクシ、即ち、榜示(ホウジ)の義だろうという。澪標ははじめ、海中にたてられた水咫衝石であるが、邑落の境に、シメツクシ注連標、ツクシモリ標森の地名がある。ツクシはもと標木であったのが、転じて、土地分割の境を意味するに至ったらしい。男ツクシ山、女ツクシ山或は、大ツクシナイ、小ツクシナイという川等、いづれも顕著な地形をもっていて境界を設定するには好都合である。それにしても木を立てゝ境を表する風習は盛んであった。
杭を標して人の地と神の地とを境する神話もその一つで、ある村を他から区分するにも標を立てた。標を榜示といい、そのたてられた場所を榜示処、したがって法事堂、法師戸などの地名も派生した。そしてこれらの標を立てるのはとりわけ屡々峠に多いことはヒョウ、立札などの地名が峠の地勢に多いことからわかる。境界を標木により設定するには、当然自然の地形も分割しやすい処を選ぶ配慮があったものであろう。境木峠とよばれる地名が、この境界の設定と標木をたてること、そして峠の地形との相互の関係を示すものであろう。いづれにしても標は注連縄のシメと同じく、堺を限って土地を占めるための人工物であり、この境界限定の営みは又自然地理の助けをもかりて、往々峠に注目し、その場所をヒョウ標からかりて、ヒョウ峠と呼ぶことになったのである。だからヒョウという地名は、堺であり、空間的な場所の把握である。峠という特長的な場所の選択と、標なる人工の事物をかりての空間関係の認知である。それは峠の地形そのものへの着目ではない。標木の事物そのものを指示するもので

もない。それは、内と外、中と外、上と下、遠近などと共に、それらを分つ境界としての位置の関係による場所のrealityの確定である。

土地をその形態、相貌、明暗などの感覚性質にしたがって命名し、空間関係として確認し、或はそこに事物そのものを見出すなど、場所認識のあり方の二三を整理して来た。場所認識は、それにしても、この二三にとゞまることはない。さらに二三の様相を数えあげることが出来る。例えば、それらは、場所の機能や効用、場所にかゝわるeventsやその場所での行事、場所占有分割などに関する制度や規約なども夫々、地名となって場所限定の視点を提供することになる。五反田、一番割、丑年縄受、別符(制度)、久木(燃料資源：効用)、判たて場(event)、おどり場、虫送り場、饗庭、玉来(行事)、など。これらについては、こゝではもう立入らない。たゞこの地名考の終りに、もう一つだけガウド、ゴート、カウドなる呼名を述べておきたい。ガウドは川処川渡であて、別に強戸、郷戸、神戸、なども同じ。川処川渡はとにかく交通の要地であり、往還の駅であり、川を渡るのに近世からは勿論渡船によったであろうが、以前は徒渉であり、したがって川処川渡は、徒渉場であり、旅人にとってそれはいうならば交通路の駅であった。駅はいづれにしても場所の機能である。機能に於ける場所の把握であろう。

3

人は土地をまえにして、それらにさまざまな名前を与えて来た。うけつがれてきた無数の地名は、それぞれに、人が土地をどのようにみたか、土地において何を把えたかを教えてくれる。だがそれにしても、土地を命名するとは人のどのような働きであろうか。或は必ずしも土地に限らず、一般に対象に名前を与える営みとは一体、いかなる機能であるのだろうか。人は今あるものに対している。そして、人はそのものにたゞ単に安易にかゝわり合っているかも知れない。あるものがその人に向けてたえず感覚的なデータを送り、人はそれをた

だ受動的、表層的にうけとり、それについて深く解釈することをしない。感覚のうったえが、断片として、here and now に孤立してたちあらわれ、やがて消えていく。データはまさしく現前するpresentばかりである。だがもし、人が、一度び対象を凝視するならば、その状況は一変する。データは単なる一片であることを直ちに放棄する。個々のまゝで、そこにひとり在ることはもはやない。個々の現前は、他のものへの働きかけの中に組み込まれていく。他との関係へ向って拡がっていく。カッシラーの説明をかりれば、対象は自らstand hereではなく他をstand forするのであり、presentではなくてrepresent するのであり、個々はつねに、一般を目ざして、一般の代表としての資格をもった個であり、他との系列の中に自らを位置づけた実在である。個は、だから、言うならば、vector を放射してたえず同類に連結し、自らの存在がつねに同類の存在を伴ってあらわれるのである。断片は全体に分節される。個々は系列に組織され、構造化される。この分節の働きをこそ、カッシラーが象徴機能と呼ぶものである。命名することは、まさしく、象徴の働きである。あれを山と呼び、これを川と呼ぶのは、あれやこれの感覚的現象を、他のそれに似た現象との比較の中に据えて見ていることなのである。そして、その比較においてそれらを同類としてまとめ上げるためには、当然、これやあれの個別の現象の各個の多彩なすがたから、同類全体に共通なすがたを抽出して、同時に、相互の微妙なくいちがいをは、かえって棄て去ってしまわなければならない。absehen というドイツ語は、象徴機能のこの辺の二相の様相を一語の中に含んでいるとカッシラーは言う。absehen とは、一方に、対象を狙い把えるさまを、他方に、対象を切りすて、無視するさまを意味するものだという。対象を見据えながら対象を覆うこの働きによって、はじめて対象を知的に関連させ、それを把えることが出来るのである。把握するとはとらえながら切りすてることであるから、この対象確認の仕方は、当然対象の肉づけをけづりとり、それを骨組に迄解体してしまって、だから、一方ではそれを貧困にしていく他はないのである。そ

れは例えば、虹にあらわれた色彩を確認しようとして、もしもその多彩な色系列を仮に七色の色相によって限定するならば、その七色の命名は、それぞれの同類へのこの虹の色の関係づけであり、個々を一般へ抽象するのであり、そしてそれは現象の知的分節であって、これこそ対象の客観的な把握であろうが、そこには同時にabsehenの二重の志向が表裏をなしているものである。だが貧困化へ向って対象を切りすてながらも、しかも依然として、対象を象徴し、命名していかなければならない。

いづれにしても命名することは分節することである。現象の混沌の中から秩序を読みとることである。地名の歴史は、場所を人々がたえず構造化して来たことを示す歴史である。

4

いろいろな地名の考察を通して、現象の構造化が、事物、空間、機能、属性などにさまざまに方向づけられてなされることを見て来た。これらのうち、とりわけ空間分節に焦点をしぼって今しばらく考えてみたい。建築なるものを、今私は限定して述べることは出来ない。私は今、建築についてではなくたゞ建築的なるものについて非常に漠然としたその領域の予想をもつことが出来るのみである。建築については、この建築的なるものにかゝわる未だ不確定の予想を、出来るだけ、着実な手続を通して、公平にありのまゝに記述し、それらを積み重ねて、やがてその作業のあとで、自らそこに結晶し浮き出て来るものとして把えることが出来るまでである。建築について、たとえ今私にある限定が思い出されるにしても、それはしばらく保留にしておかなければならない。私にとって、関心の対象は、はじてから枠づけられ定義された不動のものである筈はない。それは偏見のない考察を経て、そのあとではじめてまとまり浮び出て来るだろう。結論の先取りをあまり急ぐことは出来ない。それにしても、この目指すものが、漠とした彼方に覆われていて、出発に際してはじめから見透

され確定されてしまっているものではないにしても、今こゝで、それに近づいていくための道をいづれか選び出さなければならない。或は、いづれの方向からこの接近をはじめればよいのか。この道は出来る丈、巾広い方がよかろう。私はこゝで、建築的なるものとして空間分節にかゝわる道順を選んだ。そして空間分節にかゝわるさまざまな人間のいとなみを中性な目でながめてみようと思う。この道順が迷路であり、目標についぞ到達しないならば、又次の道に踏みかえなければなるまい。だが今は、この道を進んでみるまでゞある。やがて霞の彼方に建築なるものが、真実の建築が明析な姿を立ち顕わすであろうことを期待しながら。

空間関係を表象する地名を二三考察して来たが、こゝで、地名に限らず空間性にかゝわる言葉をしばらく問題にしてみよう。言語はもともと概念を指示し、抽象された意味を象徴する働きを最もその本来の領域とするものではあるが、それと同時に、もっと感覚的領域に密着し、感覚的表現としての言語も見逃すわけにはいかない。或は元々、この後者が前者をも支えているのかも知れない。カッシラーは一方の象徴的な言語に対して、これを擬態的な言語として区別するが(そしてその中間に直観的な言語も位置づける)、擬態的なものは、現実の感覚的、或は感情的現象を、そのまゝ音声の中にとけ込ませ、この音声の表出が、そのまゝで感覚的内容を顕わし、この連結の直接さが、象徴言語に進むにつれて緩んできて、そこでは言語は、むしろ現実からは離れてしまう。象徴とは本来、現実からの遊離だという。内容と表出との互に擬態する、互にiconicな言語では、例えばある未開人の語に於て、何か固定的な対象についてはStを、流動的なものについては l を、或は、動揺するものについては v を必ず音声に含むという。或はインド・ゲルマン語では立っているものにはsta. 流れているものには plu をつける。st, v, lにしても、sta、plu にしても音そのものにそもそも内在する表情が、表出されるもの、表情と同根である。すでにみたユラ、ユリ、等の地名は、この種のiconic な地名であろうかと思われる。そして

この擬態言語の領域に、すでに空間性の表出がみられることに注目しておきたい。これもカッシラーの指摘する例であるが、対象物が話者にとって距離が遠くに離れてあるならば、a、o、u、を、他方近くにあるならば、e、i、を用いるという。これは空間的差異の直接の表出である。感覚表出の擬態言語からすゝんで直観的な言語に於ても、空間性はその表象を助ける。さまざまな言語において、代名詞、冠詞、動詞、人称代名詞、格、副詞などが、それぞれ、それらを支える空間的配列、空間関係のとらえ方にしたがって、多様に区別されている。ある一つの動作がいかなる場所に於ておこなわれるか、それが家のうちか、外か、水上に於てか陸上に於てか、水から陸に向ってか、或は逆に、陸から水に向ってか、或は話者にとっていかなる位置に於てか等々により、区別されて呼ばれる。ある未開人語の冠詞は、話者に近くに(a)、見えないものに(o)、両者の中間に(i)となる。代名詞は、それが見える場合と、見えない場合とでは異なる等々。これらを通して、そこでの空間関係は、未だ十分に客観化された、純粋表象のそれではない。もっとその場面に密着した、流動的な関係の設定がなされている。話者にとっての、その視界に影響された、或は現実の具体的地形に拘束された次元での空間表象であり、それは透明な座標軸の表象に迄純化されたものではない。このことは、空間表現プロパーにかゝわる言語に、よりはっきりと見られる。しばしば、未開言語では、対象の空間関係は、人体の部分の関係を背景にしてとらえられる。前方は眼、顔として、後方は背として、上方は頭、項として、中は腹、口、腰、股として、等。ヤマシロ「山背」は、このように身体の空間図式の、地形への投影であろう。場所は準身体空間として具体的にイメージされるのである。

もとより人は、このような状況的な空間表象をこえて、より概念的な次元での空間関係を構築することが出来る。そしてそこでは、空間は空間として、一方的に独立し自立して、その関係が内容にかゝわることをしない。状況的な空間表象は、これに対して、そこにはつねに、意味を内在する。空間形式と空間

内容とが融合し、融即する。山の背後は同時にhinter-land でもあろう。それらは表裏をなすことがらである。地名は、つねにこのように、意味に拘束されたrealityである。土地限定は、純粋観念的に座標を設定し、或は、個々に無記的な数字をわり当てることも出来よう。そうしてこれの方がより厳密であり、より普遍性をもつものであろう。だがそれにしても地名は依然、substantialであり純粋関係に還元された土地認識ではないにしても、その必然性が地名考によって立証されるものと思う。

5

話が地名のことがらから少々飛躍するが、唐木順三が、「はかなし」という言葉について述べている。その説明をしばらくかいつまんで要点を引用してみたい。それによると、一般に形容詞は単に主体の情意をあらわすとともに（情緒的要素)、対象の客観的な属性をも示す（存在的要素)。「はかなし」も単に主体が、あるものに対してはかない情意をいだくのと同時に、あるものがそれ自らはかないのである。「はかなし」の「はか」を考察してこの二重性が示される。「はか」は、本来、土地の分割にかゝわる言葉である。田を画して一はか、二はかという。分割された土地の単位が「はか」である。「はかがゆく」、「はかどる」などは、仕事のすゝみ具合のことで本来非空間的なことがらだが、これが空間性にかゝわる「はか」から派生している。「はかり」も同根であり、きり、限ること、そして計量することである。「はかばかし」は、効果があるさま、事物がよい方へはかどるなどの通例の意味の他に、明確な、きわだっている、或は、たのみにできる、たのもしい等の意でもある。「はかなし」はこの「はか」の否定である。だから、「はか」を支えている客体的な要素、即ち土地、空間、その分割と限定、或はさらにその計量、そして、それらに伴う明確にきわだっている様、たのもしい様なども「はかなし」では当然否定される。「はかなし」はだから単に主体の情緒にかかわるだけのものではなくて、客体

的なもの〻指示でもあるという。

この説明で主要に注目されていることがらは、「はかなし」の主体的—客観的な二面性である。主体の感情としての「はかなし」は対象の「はかなし」によって支えられていること。この主観、客観の相互表裏性の指摘は興味深い。だが「はかなし」の解釈をとおして私のこの小論の筋道から、よりはっきりと注目しなければならないのは、むしろ空間把握と感情性質とのかかわり合いについてである。客観的なものとして数えられている空間分割、空間限定、或は空間計量が、同時に、きわだち顕著であり明確でありにつながり、しかもたのみになる、たのもしいを生ずる。即ち「はか」「はかり」が「はかばかしい」を派生することである。或はむしろ「はか」「はかる」の知的な空間確定が「はかばかしい」の感情的内容にいつのまにか移り変ってしまっていることである。両者が「はかなし」の言葉において融け合っていて、連続する。こゝでは二つは対極に分けてしまわれることは出来ない。言葉は、それらの論理的分割のまえに、このことを見事に証言する。本来空間分節、そして空間認知は、そこにたちあらわれる空間の感情性質の確認と同根のものである。根底においては同一のことがらである。この「はかない」「はかばかしい」の感情的内容は、もとより、対象が自らはかない、はかばかしい、所謂対象感情でもあり、又主体がそれに対してはかない、はかばかしい状態感情でもあろう。「はか」「はかる」において対象が自らきわだつ、そしてたのもしく、安定したのと共に、主体がそれに対してたのみにできる、安心の情意をいだくのである。空間分節のさまざまないとなみを——それを地名の考察を通してみてきたように——あらためて注目し、その構造化への志向の必然性を、もしも心理学的な視点から説明しようとすれば、この後者の意味での主体における「はかなし」「はかばかし」の情意が、「はか」「はかる」への一種の動因として働いて、空間分節をうながすものであることが納得できよう。たしかに空間分節はもっとpragmaticな領域での必然性をもっている。空間が組織されなければ、日常のさまざまな

生活に支障するだろう。厳密な、正確な確定がいるだろう。だがこのpragmaticな説明でだけで、空間分節をつくすわけにはいかない。「はかなし」から「はか」への志向は、「はかばかし」へあこがれる感情的なエネルギーによって支えられていることが見逃がされてはならないだろう。土地の知的分節の歴史は、かくして、その必然性をもつのである。

*　　*　　*　　*　　*　　*

建築的なるものとは、人間存在のこのような深い根底から自ら必然的にうながされる空間構造化への行為そのものをうちに含んでいるということが出来よう。